

目次

第15回大会報告

自由研究発表・シンポジウム・関連企画

総会報告

大会を終えて…………… 師岡 章

学会15周年記念事業に関する小報告会…………… 高田 文子

大会発表・参加記…………… 有川優子・佐藤浩代・田中謙・立浪朋子・奥野修史

寄稿 コドモ文化とコドモ観の変容を大きな目で見るために

— 大会シンポジウム2019年に寄せて…………… 宮澤 康人

報告 *What is "quality transition"?* WERA-Tokyo 2019 発表報告 …… 榎 瑞希子ほか

新入会員・会員異動 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

第15回大会報告

2019年12月7日に白梅学園大学・白梅学園短期大学（J棟）で、幼児教育史学会第15回大会が開催され、自由研究発表・総会・シンポジウムが行われました。大会の詳細は以下の通りです。

自由研究発表 10:00 ~ 12:30

司会： 榎 瑞希子（聖徳大学）  
松島のり子（お茶の水女子大学）

1. エリザベス・グルネリウスの思想形成  
— 弟アンドレアスが残したノートを手かがりに—  
有川 優子（関西学院大学大学院）
2. 19世紀後期シカゴにおける幼稚園運動保守進歩派の形成過程  
野尻 美枝（立教女学院短期大学）
3. 北海道「ことばの教室」における幼小中支援体制整備の展開過程に関する研究 —北海道深川市「深川市言語治療教室」の事例分析—  
田中 謙（日本大学）
4. 功刀嘉子の保育論 —『保育教材 幼児の遊びと指導』（1944年）の検討を中心に—  
佐藤 浩代（東洋英和女学院大学）
5. 野口幽香の少女・青年期 —二葉幼稚園創設の背景の一つとして—  
松本 園子（白梅学園大学）

6. 斎藤公子 — その人と保育実践

宓戸 健夫（愛知県立大学）

シンポジウム

15:00 ~ 17:30

テーマ：「子どもの遊びが生まれるとき  
—よみがえれ、文化の力—」

企画者：首藤 美香子（白梅学園大学）  
司会者：長井 覚子（白梅学園短期大学）  
話題提供者：首藤美香子（白梅学園大学）  
周東 美材（大東文化大学）  
浅井 幸子（東京大学）

懇親会 18:00~20:00

中国料理「浜木綿」国分寺北町店

関連企画（12月8日 10:00~12:30）

「学会15周年記念事業に関する小報告会」

## 総 会 報 告

2019年12月7日 14:00 開会  
議長に大会会場校の師岡会員が選出された。

### 報告事項

#### 1. 第14回大会年度(2018.10.1~2019.9.30) 会務報告

◇福元事務局長より、会員数、第14回大会の開催について報告された。

- (1) 会員数：2019年11月末現在171名
- (2) 第14回大会：2018年12月8日、関西学院大学にて開催。大会参加者58名、関西学院幼稚園見学会参加者8名。

#### 2. 編集委員会報告

◇浅井編集委員長より以下の報告があった。  
・『幼児教育史研究』第14号、2019年11月10日付で発行(編集委員長 浅井幸子(投稿論文担当)、編集副委員長 湯川嘉津美(書評担当))。投稿論文の総数は5本、うち研究ノート2本を掲載。その他シンポジウム講演者の報告記録4本、書評1本、図書紹介3本を掲載。

#### 3. 会報の発行について

◇福元事務局長より、会報の発行について報告された。  
・第27号を2月20日、第28号を6月20日に発行。それぞれについてその後Web公開版をアップした。

#### 4. 役員選挙について

◇福元事務局長より、役員選挙について告知された。  
第15回大会年度において、次期の役員選挙を実施する。第15回大会総会(今回)での告知後、6月の会報で周知し、7月に選挙・投票を実施、8月に開票する。

#### 5. 15周年事業について

◇太田会長より15周年記念出版につき報告があった。  
10周年のときに企画を形にできず、5年間延びてしまった。その間にいろいろな構想が出されたが、15周年記念を逃さないように理事を中心に6回にわたる検討を進めた結果、現在2巻本、各3部での構成案を立てている。この出版が最後にならないように。これで弾みをつけて図書を刊行していける学会になるように願いを込めながら編集にあたっている。明日12/8(日)に、小報告会を実施する。

#### 6. その他 特になし。

### 審議事項

#### 1. 第14回大会年度(2018.10.1~2019.9.30) 決算

◇小玉理事(会計担当)より、「第14回大会年度幼児教育史学会収支報告」(表1)に基づき報告がなされ、別府会計監査からの監査報告があった。会員より、宍戸会員の寄付30万円について資料に記載されているかの質問があり、小玉理事より繰越金のなかに含まれている旨の説明があった\*。

⇒以上を踏まえ決算報告が承認された。

#### 2. 第15回大会年度(2019.10.1~2020.9.30) 事業計画

◇福元事務局長より以下の(1)(2)(3)につき説明があり、承認された。

##### (1) 『幼児教育史研究』第15号の編集

・編集委員長(湯川理事)、副編集委員長(浅井理事)について承認された。(申し合わせに従い、正副編集委員長は1年交替とする。正委員長は翌年副委員長として残り、業務の円滑な引継ぎを図る。)

・投稿募集その他：編集規程・投稿要領に従う。

##### (2) 会報の発行

・発行時期：従来通り2月頃(第29号：第15回大会報告)、6月頃(第30号：第16回大会案内、役員選挙告知) 内容：会員研究情報などの充実に努める。

##### (3) 第16回大会の予定

・会場：山梨大学 ・実行委員長：秋山麻美会員

・日程：2020年12月12日 土曜日(予定)

#### 3. 第15回大会年度(2019.10.1~2020.9.30) 予算案

◇小玉理事(会計担当)より、表2「第15回大会年度幼児教育史学会予算」に基づき予算案が説明された。

・前年度からの主な変更点は、今後縮小が見込めそうな科目(事務局経費、機関誌編集経費、J-Stage経費、消耗品費等)の予算を削減する一方、15周年記念事業費予算を重点的に厚くし、役員選挙経費を新たに計上したことである。

・会員より消費税増税分は反映されているかの質問があり、小玉理事より十分に賄える見込みとの説明があった。

⇒以上の予算案につき承認された。

#### 4. その他

◇別府会員より補足説明：本学会が研究会から学会になる時に宍戸初代会長から30万円の寄付があり、定期預金を組んでいた。特に、使途を定めたものではなかったが、周年記念事業の機会にそれを使わせていただくということになり、事務局引継ぎの際、定期預金を解約して普通預金に含めてあったものである。

◇太田会長より、秋山麻美次回大会実行委員長からのご挨拶は、事情により、翌日になる旨の案内があった。

以上をもって議長は解任され、14:30 閉会となった。

## 大会を終えて

### 第15回大会実行委員長 師岡 章（白梅学園大学）

2019年12月7日（土）、幼児教育史学会第15回大会を白梅学園大学・白梅学園短期大学で開催させていただきました。都内とはいえ、交通の便が悪い会場にもかかわらず、参加者は74名（一般会員52名・院生会員6名、当日一般参加者7名、当日院生参加者9名）と、大変多くの方々にご参加いただきました。大会当日に至るまでの理事各位からのご助言・ご支援ならびに学会員の皆様のご理解・ご協力の賜物です。心より感謝申し上げます。

大会は、例年通り、10時から12時30分までを自由研究発表、14時から14時30分を総会、15時から17時30分までをシンポジウムという内容で編成させていただきました。

そのうち、午前の自由研究発表は昨年同様6件あり、発表内容から1～2件目を「海外の幼児教育史」、3～6件目を「国内の幼児教育史」と大別し、プログラムを組ませていただきました。若い研究者から重鎮の先生方までの幅広い研究発表は、参加者の興味を掻き立ててくれる刺激的な内容ばかりでした。質疑応答も活発になされ、今後の幼児教育史研究の拡大・深化を感じさせるものとなりました。発表に関するレジュメ・資料も、事前に60部以上のご用意をお願いした結果、当日、実行委員会の方で増刷することなく配布できました。ただ、発表時間は申し込み時には質疑応答を含めて30分とお伝えしていたものの、設定時間と発表件数の関係で25分とさせていただきます。発表者の方々に改めてお詫びするとともに、開始時間を早めるなど、柔軟な対応が必要であったと反省しております。

次に、午後のシンポジウムについては、保育者養成校として長い歴史を持つ本学らしいテーマを実行委員会でも検討する中、「子どもの遊びが生まれるとき—よみがえれ、文化の力」と設定させていただきました。「子ども」と「文化」を論じる場合、絵本等の児童文化財を想定するケースが多いと思いますが、今回は「遊び」に注目しました。具体的には、児童文化がひとつのジャンルとして確立された1920年代を、遊びをめぐる言説・実践・消費文化・メディア・表象を連関させながら俯瞰しました。その上で、新しく子どもの生活世界にもたらされた音や声、語り、デザインや色、手触り、におい、味わい、動きとともに、子ども期の遊びの意味や価値がどう変容したのか等について、「子どもの視点」から検討しました。学会外から周東美材先生（大東文化大学）をゲストとしてお招きしたこともあり、「文化としての遊び」の考察をより深める機会になったと思います。

大会後には、大学近隣の「中国料理 浜木綿」で懇親会を開催し、当日申し込みを含め26名のご参加をいただきました。本学学長である近藤幹夫先生の進行のもと、ゆったりとした素晴らしい会となりました。院生の参加もあり、研究テーマの設定や方法論について、活発な意見交換もなされたことも印象に残りました。

なお、今回は諸般の事情から附属幼稚園の公開保育を企画できませんでした。また、14回大会のように本学の歩みを紹介する企画も検討しましたが、実行委員長の力不足で見送ることになりました。楽しみにされていた方々には、心よりお詫び申し上げます。

また、本年度の大会翌日の関連企画は、恒例の「愉フオロ会」に代わり、以下の通り15周年記念企画の小報告会が開催されました。

さて、来年度の大会は、秋山麻実先生を大会実行委員長として山梨大学で開催されます。会員の皆様のより一層のご協力をよろしくお願いいたします。

## 学会15周年記念事業に関する小報告会

### 高田文子（白梅学園大学）

大会翌日の8日（日）10時から2時間半にわたって、学会15周年記念出版に関する小報告会が開かれました。参加者は、執筆予定者、院生などを含めて30人弱でした。太田素子学会長による趣旨説明や共有したい立脚点についてのお話のあと、上下巻それぞれ内容の括りによって、2グループずつ、計4グループに分かれて、報告・討議の時間を持ちました。

当日参加できなかった方も含めて執筆内容のレジュメをご用意いただいた報告会でしたので、参加者にとっては、前後を含めた流れをイメージしつつの議論が叶い、タイトルや章立て、内容についてなど、白熱した知見交流の時間となりました。

出版に向けての貴重な意見交換の場となっただけでなく、参加者からは、学会ならではの充実した議論のできるこのような機会を今後とも継続してほしいという声があがり、院生からも、一国史では見えない幼児教育の世界的展開のあり方が、各国の事情とともに見えてきてよかったとの感想がありました。

ここに、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

## 大会発表記・参加記

### 初めての大会発表

—シュタイナー教育100周年の年に—

## 有川 優子 (関西学院大学大学院・院)

昨年度の第14回大会(於:関西学院大学)では「愉フォロ会(通称)」で発表させて頂き、その時に入会しました。大会発表は今年度が初めてでした。

私とシュタイナー教育との出会いは自身の経験からでした。0歳から5歳までシュタイナー教育を取り入れた保育園で育ったことから関心を持つようになり、大学学部時代からシュタイナー幼児教育に焦点を当て研究をしています。大学院入学後は毎年、調査や資料収集のためにヨーロッパに足を運んでいます。

今回は「シュタイナー幼稚園創設者グルネリウスの思想形成—弟アンドレアスが残したノートを手がかりに—」というテーマで発表させて頂きました。目的はエリザベス・グルネリウスの弟の記事から彼女の思想形成の一端を明らかにすることでした。先行研究ではシュタイナー幼稚園はシュタイナーの死後、弟子のグルネリウスによって創設されたため、シュタイナー幼児教育にはシュタイナーの思想だけでなく、彼女自身の思想も含まれていることが示唆されています。しかし、グルネリウスの子ども時代や家族に関する資料から彼女の思想形成について明らかにする研究は現段階では存在しないため、本発表ではエリザベス・グルネリウスの家庭環境に焦点を当て、弟の資料から考察したことを報告しました。資料からはグルネリウス家にはシュタイナーの思想に大きく影響を受けていた家庭教師が存在し、弟とエリザベスはその家庭教師から学んでいたこと、両親がシュタイナーの考え方に関心があったことからシュタイナーの考え方や存在が身近にあったことなどが明らかになりました。発表後の質疑応答や懇親会では、多くの方々から貴重なご意見を頂くことができ、大変勉強になりました。今後の研究課題として一つ一つ取り組んでいきたいです。

大会が行われた2019年という年はシュタイナー教育100周年の年でもあり、私にとって特別な1年となりました。2019年はドイツのシュトゥットガルトで行われたシュタイナー教育100周年記念国際会議とフランス(アルザス地方)にあるコルベスハイムというエリザベス・グルネリウスの故郷に行きました。コルベスハイムではエリザベス・グルネリウスの甥と直接お会いし、グルネリウス家を知る村人ともお話しでき、貴重な経験ができました。現地でしか手に入れることのできない史料の収集や貴重な経験を通して改めて現地に行くことの大切さを痛感しました。

自身の研究テーマである「シュタイナー幼稚園創設者エリザベス・グルネリウスの思想形成」に関する研究は少なく、未だ多くの研究課題が残されています。今後も現地に行き、史料を収集することによって彼女の思想形成過程を綿密にたどり、研究していきたいと考えています。

この場をお借りして関わってくださった皆様に改めて感謝申し上げます。来年度の大会も心より楽しみにしております。



## 第15回大会に参加して

### 佐藤 浩代(東洋英和女学院大学)

2014年10月に入会后、この度第15回大会において初めて発表させて頂きました。幼児教育史に興味関心があり入会したものの、自分の関心は自校史に留まり、幼児教育史においていかなる意味をもつのか見出せずにいたのが、なかなか発表に至らなかった理由の一つです。そのようななか、長くキリスト教幼稚園において保育者として過ごしてきたこともあり、第14回大会シンポジウム「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」を拝聴いたしたく、関西学院大学に向かいました。自身が携わってきたキリスト教保育について、歴史から学ぶ意味とおもしろさに目覚め、懇親会にて自己紹介の機会をいただき、「来年は発表しよう」と自分に宣言し、この度の発表に至りました。

本発表「功刀(くぬぎ) 嘉子の保育論—『保育教材 幼児の遊びと指導』(1944年)の検討を中心に—」を進めるなかで、史料を客観的に、正確に読み解くことの重要性和難しさをあらためて実感しました。功刀に関する研究に着手したのは、同窓であることがきっかけですが、同窓ゆえに取り入れたい情報や資料をいかに削いでいくのか、この発表で明らかにすべきは何であるのか、限られた時間内で何をどのように発表するのかを深く考えさせられました。質疑応答で十分にお答えできる内容を持ち合わせていなかった点につきまして、同時代に活躍した研究者の動向や主張の吟味を加えたいと功刀の保育論をいかに捉えていくのか、今後の課題としていきたいと思っております。ご質問や励ましをくださいました会員みなさま、ありがとうございました。

2日目の「学会15周年記念出版について」は、たくさんの資料を手を、整理するのも一仕事でした。執筆者、参加者の幼児教育史への熱い思いや議論に触れ、新たな関心が芽ばえたり、ものの見方、捉え方に気づかされたり、有意義な時間となりました。出版されるのが楽しみです。

冬晴れの日、自然豊かな武蔵野の地、白梅学園大学・白梅学園短期大学にて2日間にわたる学会がスムーズに開催されましたのは、関係者みなさまのご準備、ご尽力の賜物と思っております。とくに、懇親会後のバスの手配は大変有り難いものでした。師岡先生におかれましては、研究発表に関する細やかなメールでのご連絡に感謝申し上げます。

## 大会参加を通じ、考えたこと

### 田中 謙 (日本大学)

日本大学文理学部の田中謙と申します。この度は学会より大会での発表の機会と共に参加記をまとめる機会をいただきました。そこで自身の研究紹介を踏まえ、記させていただきます。

私の研究テーマは「戦後日本の障害乳幼児支援の展開過程」となります。特に教育、福祉、医療、保健等各領域での支援事業等の歴史を、組織経営、組織社会学を中心に関連する制度、政策、行政との関連から検討を行ってきました。第15回大会で発表させていただいた「北海道「ことばの教室」における幼小中支援体制整備の展開過程に関する研究—北海道深川市「深川市言語治療教室」の事例分析—」もその一環となります。フロアの会員の先生方からいただきました「研究デザインを示した報告の必要性」等のコメントは、今後の参考とさせていただきます。

今日、日本社会ではダイバーシティ・インクルージョン社会の実現に向けた政策が展開されており、幼児教育・保育領域でも障害や貧困、虐待等の特別なニーズに応じた支援の充実が求められています。幼児教育史の中でも障害に限定していえば、「障害児保育」の歴史として、城戸幡太郎元北海道大学教授の発案により始められた「北大幼児園」等、先駆的に支援環境を整備してきた取り組みがよく知られており、研究報告も蓄積されつつあります。特別支援教育をはじめとする特別ニーズを主なテーマに掲げる関連の学会でも特別なニーズに焦点を当てた研究が行われています。

しかしながら、これらの一つひとつの研究報告が各学会でなされるようになってきてはいますが、各学会に参加する一研究者の立場から見ると、なかなか研究者や研究成果をつなげていく機会が少ないことも実感しています。特に障害等の特別ニーズを主とする学会以外では、ダイバーシティ・インクルージョン社会の実現に向けた議論が求められるものの、議論が深まりにくいこと傾向にあるのではないかと考えております。

幼児教育史の中では、先に述べた「北大幼児園」に限らず、特別ニーズを有する子どもたちを含む子どもたちが生活する幼稚園、保育所等での先駆的な取り組みが複数展開してきた歴史を有することが知られています。ぜひ幼児教育史学会でもこれらの研究がますます盛んになるとともに、他の学会とつながる中で幅広く議論ができる場を整備していただければと、本大会への参加を通じて考えました。会員の一人としてもそのような場の実現に、微力ながら力を尽くしたいと考えております。

## 亡き母にとっての大切な存在

### 立浪 朋子 (新見公立大学)

この度、幼児教育史学会に参加・入会させていただきました。私自身の本学会への参加は今回が初めてでしたが、亡き母、立浪澄子が会員として長年参加させていただき、母にとってとても大切な存在であったことはいつも聞いておりましたので、参加前から親しく感じ大会当日を楽しみにしておりました。この場をお借りし、母が大変お世話になりましたこと幼児教育史学会の皆様へ心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

学会に初めて参加する時はいつも緊張するものですが、今回の大会では多くの先生方から声をかけていただき、母との思い出話や私も知らなかった母の一面を話していただき、初めてなのに懐かしいような、温かい時間を過ごさせていただきました。

一方で、午前中の研究発表および午後のシンポジウムでは、大変興味深い発表を拝聴し、刺激的な時間を過ごすことができました。これまでは障害児教育史、感化教育史を中心に学んでおり、恥ずかしながら幼児教育史は門前の小僧だっただけの初学者なため、理解は不十分だったかもしれません。しかしながら、どの御発表も新しい知識や知見を得る機会にあふれ、大変勉強になった一日となりました。特に、障害児教育史でも重要人物として登場する何人かの人物が、幼児教育史ではまた違った評価や捉え方をされていることに驚き、自分の狭い分野だけを学んでいては駄目だと反省させられました。

昨年4月より、微力ながら未来の保育者を育てる仕事に携わらせていただいております。保育の学生とはこんなに真剣に学ぶのか、こんなにひたむきに努力をするのかと感動を覚える毎日を送っております。研究発表の合間には先生方から研究はもちろん、保育者養成のあり方について温かいご助言をいただきましたことも、大変嬉しいことでした。

これからも幼児教育史学会を通して、研究や教育の楽しさを味わえたらと思っております。来年度の大会でも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 新入会員としてのご挨拶

### 奥田 修史 (筑波大学大学院・院)

この度、幼児教育史学会に入会させていただきました。筑波大学・院生の奥田修史(おくだしゅうじ)と申します。現在は、アメリカにおける教員養成史に関心をもち、特に1920年代以降のアメリカにおいて、小学校教員養成と幼稚園教員養成が互いにせめぎ合いながら展開した点に注目して研究を進めております。1920年代以降のアメリカは、小学校の一学年としての幼稚園の位置づけが



確立する過程にあり、他方で保育学校が普及する時期でもあったため、初等教育全体が大きな改革の時代にありました。その時代の教員養成に焦点を当てて研究を進めることで、今日の幼保一元化や幼小接続改革に対して、教員養成の観点から何らかの示唆が得られるのではないかと考えております。

私自身は東京学芸大学を卒業後、筑波大学大学院に進学し、学校経営学研究室に所属して学校経営や教師教育について学んでおります。現在は上記のテーマに基づいて修士論文を執筆し終えたところですが、この修士論文のテーマを模索する中で幼児教育学・保育学領域に関心をもちました。そのため、現在は専門用語の定義から勉強しているところです。未熟者ではございますが、今後とも、様々な場面で会員の皆様からのご指導・ご鞭撻を賜ることができれば幸いです。

さて、この度、学会大会にも初めて参加させていただきました。午前の研究発表や午後のシンポジウムにおける議論からは、全体的な史的動向の中に個別事例を位置づけることに対する意識を感じました。これまでの幼児教育・保育論の展開や教育史的動向を大きく捉えた上で、個別事例をその中に位置づけ、新たな知見を見出す。このような点を踏まえて、私自身の研究の在り方を見直す必要性を痛感させられました。

また、発表者とフロアの間において、テーマに関するある一定の共通理解が存在し、その上で非常に密度の高

い議論が展開されているように感じました。こうした共通理解の基盤には、幼児教育史研究の視角から今日の教育の相対化を図る志向性があると考えますが、自身の浅学のため、その共通理解を把握することがかなわず、議論にしっかりとついていけなかったことが悔やまれます。この度の学会大会参加を通じて、自身の勉強不足を痛感いたしました。同時に、幼児教育学・保育学の知見に学ぶことが、自身の研究の発展にとって大変重要であることも改めて認識いたしました。

今後、貴学会における議論に積極的に参加し、勉強したいと思っております。



## 寄稿

### コドモ文化とコドモ観の変容を大きな目で見するために

— 大会シンポジウム 2019 年に寄せて —

宮澤康人（大人と子供の関係史研究会）

1920年代のコドモ文化とコドモ観の変容に焦点を当てたシンポジウムのテーマは、間違いなく豊かな可能性をはらんでいます。それだけに、その可能性を実り豊かにするために、タテ・ヨコの多様な歴史的文脈を張り巡らすことが求められるでしょう。

タテとは、アナール派の歴史学革命が提唱した、短期、中期、長期の三つの重層的波動の文脈を、ヨコとは、一つの国民国家を超える比較史的な文脈を意味します。それによって、1920年代の、表面だけでは見えにくい、光と闇の、深い矛盾を秘めた深層に迫ることができるのではないのでしょうか。

1920年代といえば、日本では大正8年から昭和4年にあたる時代です。大正自由教育という言い方も

あります。空前の経済発展と諸文化が開花する時代です。そうでありながら、同時に昭和恐慌から天皇制軍国主義体制に突入する前夜でもあります。

ドイツでは、華麗で前衛的なワイマール文化の時代であるとともに、ナチス台頭の条件が胚胎して行く時代です。イタリアでは、ムッソリーニがイタリアに秩序を導入したとしてヨーロッパ知識人に支持される時代でした。アメリカ合衆国では、金ぴか時代とも呼ばれる高度消費文化が栄えるときであると同時に、大恐慌への底流が淀む時代でもあります。ソヴェート・ロシアでは、好調な第一次五か年計画とアヴァンギャルド文化の時期でありつつ、スターリン体制が用意される年代でもあります。

このように 1920 年代は、政治・経済と文化の間の、そしてたぶん、文化それ自体の内部において、世界の近代化に伴う諸矛盾が深まっていく過渡期の一段階とも言えます。あるいは、国ごとに差異のある、しかも共通性もある危機を迎えようとする年代です。文化と対抗文化がせめぎあう時代でもありました。

この時、世界は、すべてを商品化して行く資本主義がいつそう浸透するという連続的の流れの中にあるとともに、他方では、金融資本主義の成立に伴う世界大恐慌の要因が蓄積され、それに並行して、帝国主義国家間の対立が激しくなる、資本主義の新たな段階に突入しつつありました。

西欧思想史のうえでは、1920 年代は、近代思想の根幹を揺るがす、いわゆるポストモダンへの移行過程の重要局面と見られています。

19 世紀末に始まる、モダンからポストモダンへの転換の特徴を、中埜 肇さんは見事にシェーマ化しています。

「人間の能力に対する徹底した信頼」を意味する「広義のヒューマニズム」と「自然と社会との両方に法則的秩序が内在」し、それを人間の理性は把握できるという確信を意味するラショナリズム、この二つが、デカルトからヘーゲルに至る「モダンの思想」の根幹を構成します。それに対抗して、19 世紀半ば以降の、キルケゴール、マルクス、ニーチェ、フロイトを経て 20 世紀末に至るポストモダニズムの流れが生じます（中埜 肇『近代の思想』1989 年）。

1920 年代はまさしく、その画期的な一段階と見られています。自然と人間の理性的秩序に信頼を置く「近代人」像が揺らぎ、コドモを「近代人」に発達させるという教育目的も不信に晒されることとなります。

さらに、現代までを視野に入れると、こういう文脈が浮びあがります。

「人間中心の「知」を超える試み」という副題を持つ一文において、小林康夫さんは、「人文学」を「問い直」すために、次のような現状認識をします。

「過去半世紀間の情報テクノロジーの発展によって、人間の能力の中核と考えられていた判断能力や情報処理能力などが AI（人工知能）によって、圧倒的に凌駕されるという事態になっていること」

（これ自体すでにテクノロジーという人間独自の文

化が「人間の能力の中核」を無用化するという逆説をあらわにするものですが）、その一方で、「人類の文化経済活動の総体が地球環境に重大な影響を及ぼし、他の多くの生命種を減ぼしていること」（日本経済新聞 2019 年 12 月 14 日）、これが、現代文明の現実であると判断されます。

更に私見を加えるなら、生命に有害なゴミを大量に排出するという、他の生物にはない能力によって、ヒトは、水、土、大気を汚染します。そして、地球温暖化どころか、人類自身を含む「生命種」全体を破滅に追い込みかねない自然環境破壊を推し進めています。

また例えば、ヒトを脅かす病原菌を撲滅するための抗生物質の開発の行き詰まりも予測されます。病原菌の世代交代の速度が、人間の医療薬開発のそれをはるかに上回るため、最終的にヒトは対抗菌にかなわないという観測もなされています。ヒトの文化は、「他の生命種」どころか、人類自身を滅亡に追い込む事態に立ち至っています。

このような現代文明は、自然に対する人間文化の勝利ではなく、もとよりヒューマニズムとラショナリズムの勝利とは言えません。

となれば、現代の人文学の課題は、文化と環境を無差別に対立的にとらえる誤りを正すことです。まず自然的環境と文化的環境を概念的に区別したうえで、自然と文化の対立こそが根本問題であると認識することです。今や、文化の再生ではなく、文化の革命が要請されます。その構想を人類規模で練らなければならない時です。1920 年代は、同時代人がそう自覚していなかったとしても、それへの先駆けの時代であるかもしれません。

このような流れの中で、近代化とポストモダンの、光と闇の矛盾の深まりがあり、その流れの一段階として、1920 年代もあるということになるでしょう。要するに、大きな文脈において見ることによって、コドモ文化、そしてヒト文化をめぐる、1920 年代の個々の具体的事実の意味づけが深まり、掘り下げるべき新たな課題も姿を現すのではないのでしょうか。（なお、「文脈」ということでは、拙論（「教育史に「おもしろさ」は必要か」『教育史フォーラム 第 14 号』2019.6\*）を参照していただければ幸いです。）

\*刊行：「教育史フォーラム・京都」事務局（京都大学大学院教育学研究科駒込研究室）

## What is “quality transition”?

## WERA-Tokyo 2019 発表報告

梶 瑞希子(聖徳大学) ほか

2019年8月5日から4日間にわたり WERA-Tokyo2019(世界教育学会 10周年記念大会)が開催された。幼児教育史学会では、8月8日に日本における接続期問題の歴史を主題とするシンポジウムを行った。以下その顛末を報告する。

発端は、2018年3月の教育関連学会連絡協議会<sup>1)</sup>における佐藤学会長(学習院大学)の参加呼びかけであった。10月の臨時理事会で議題とし、12月8日の総会において、シンポジウムの開催を提案し、承認を受けた。企画・実施は理事で担当することになった。日本で開かれるとはいえ、国際学会である。英語で企画書を提出し、採択されなくてはならない。期限は、2月1日。相談の上、以下の申請を行った。

## テーマ: What is “quality transition”?

— Examination of transition from early childhood education to primary education from a historical perspective —

座長: 梶瑞希子(司会、趣旨説明)、太田素子  
 話題提供者: 浅井幸子、太田素子、小玉亮子  
 指定討論者: 湯川嘉津美、高田文子  
 通訳: 麓 浩子

申請は Web 上で行うことになっていた。仕組みが分かりづらくて難儀したが、3月末に無事、採択通知を受けとることができた。次は、シンポジウムの概要登録である。ここで、まともな難題に遭遇した。3名の話題提供者それぞれに「8,000ワードの論文」の登録が求められたのである。シンポジウムは、指定討論を含め、登壇者全員による共同の営為である。「全員の論考を集めて1本の論文を登録」ということであったのならまだしも、登壇者3名のみ論文登録の機会を与えるというのは承服しがたいことだった。無視を決め込んだものの、3つの指定枠に何らかの文書を登録しないと先に進めない。プロポーザルと同じ文面を貼り付けて、その場をしのいだ。

シンポジウムは、1枠が90分の設定であった。6名が登壇する企画である。趣旨説明4分、話題提供者1人につき14分、指定討論は通訳込みで15分とした。これでフロアを交えた討論時間が14分確保できるはずであったが、慣れない英語での発表で5分しか残らなかった。会場には、20名ほどの参加者

があった。「発表(英文)論文は?」と聞かれ、日本からの情報発信が待たれていると感じた。会場の様子を伝える写真は、残念ながら1枚もない。写真撮影にまで、誰も気が回らなかったのである。発表概要は次の通りである。[梶]

## 【趣旨説明と導入】

近年、接続期が国際的な課題となり、就学前施設の学校化が懸念されている(OECD保育白書)。しかし接続期をめぐる論議は、今に始まったことではない。1870年代に最初の幼稚園が設置された日本では、20世紀初頭以来、接続期カリキュラムの開発・試行が進められてきた。本シンポジウムでは、日本における接続期問題への取り組みはプロジェクト・メソッド導入に始まるという認識のもとに、歴史の長い3つの幼稚園を取り上げ、それぞれの取り組みと課題を明らかにする。分析にあたっては、Moss<sup>2)</sup>による就学前教育と義務教育の関係の3タイプ:「学校教育への準備」(readying for school)、「固有かつ対等な存在同士の連携」(strong and equal partnership)、「出会いの場」(the vision of a meeting place)を援用する。[梶]

1) 日本学術会議協力学術研究団体のうち教育関連の任意加盟組織。本学会は、発足当初より会員となっている。

2) Moss, P. ed. (2012), *Early Childhood and Compulsory Education*, Routledge.

## 【話題提供】

## 1. 初期の接続期課題への取り組み:

浅井幸子(東京大学)

1920年代から50年代の幼小連携・接続の議論を、日本の幼児教育に影響を与えてきた3つの実験学校に即して説明した。幼児教育から小学校教育への接続カリキュラムは、1920年代に、アメリカの進歩主義教育の



影響を受けて本格的に議論されるようになった。東京女子師範学校附属幼稚園と明石女子師範学校附属幼稚園は、コロンビア大学ティーチャーズカレッジのヒルとキルパトリックの「コンダクト・カリキュラム」に学んだ。前者はプロジェクト・メソッドを導入して誘導保育を開発したが、小学校とは連携しておらず、その保育は自由遊びに近いかたちをとった。後者は幼稚園と小学校をプロジェクトにおいて貫く統合カリキュラムを開発した。さらに1940年代末、第二次世界大戦敗戦後にプロジェクト・メソッドが再び導入された際にも、「明石プラン」と呼ばれる統合カリキュラムが開発される。コア・カリキュラム連盟の実験学校である和光学園においても、統合カリキュラムの開発が試みられた。その特徴は、興味や態度を重視する社会適応主義に指摘できる。[浅井]

## 2. 1970年代の幼年学校構想：

### 太田素子（和光大学）

1970年代から80年代の幼年学校構想をめぐる保育関係者の議論と現場の実践的な模索について報告した。中央教育審議会答申の幼年学校構想—4・5歳から小学校低学年をまとめる4-4-5学校制度区分の構想—が出された直後、全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会の研究大会では、制度の内実を作る幼小接続のカリキュラムの形成を視野に入れた教育要領のあり方が議論になった。それは直接には、幼児教育の教育目標を年齢別到達基準として定めることが適当かどうかという論争になった。岡山、千葉、宇都宮の参加者は、遊び重視や幼児期の発達の個人差の重要性などそれぞれの立場から、年齢別到達基準に反対した。

日本の国立大学附属学校園にはアメリカの進歩主義教育、特にホーレスマン・スクールの実践の影響があり、幼児学校にはある種の親和性があった。1970年代後半から80年代にかけて、幼小接続カリキュラムの研究は、「総合学習」の研究と重なりながら試行が続けられていた。神戸大学附属の総合学習と、和光学園の総合学習は同じくプロジェクト型の教育を目指しながら、教育目標の考え方では対照的な性格を持っていた。（『教育目標・評価学会紀要 第29号』2019.12, 科研費（17H2670）報告書に発表予定）[太田]

## 3. 1990年代以降の新動向：

### 小玉亮子（お茶の水女子大学）

幼児教育から小学校への移行が社会問題と見なされるようになったのは、1990年代前後移行のことで

ある。1989年の幼児教育と小学校低学年のナショナル・カリキュラムの同時改訂は、幼稚園から自然と社会を、小学校低学年から理科と社会という枠を削除する大胆なものであった。新しいカリキュラムに対応すべく、幼児教育と小学校低学年教育は模索を始めたが、それは少なからぬ教育現場に混乱をもたらすものでもあった。

本発表が取り上げるお茶の水女子大学幼稚園・附属小学校は、このカリキュラム改訂で混乱をすることはなかったが、しかし小一プロブレムが社会問題になっていくこととも連動して、幼稚園を小学校の接続に関する実践を本格的に開始した。附属幼稚園も小学校も子どもの自発性を重視するという価値観を共有していたが、それだけでは十分ではなく、2000年代の共同研究では、相互に顔の見えるコミュニケーションを図ることが重要なステップとなった。幼小接続期の新しいカリキュラムを模索する中で「円滑な移行」のみならず「適切な段差」を不可欠とみなし、幼稚園を小学校の準備段階とみなすのではなく、その逆に幼児教育の考え方を意識する小学校低学年カリキュラムの試みに踏み出すこととなった。ここでの試みは、いわば、モスのいう、「固有かつ対等な存在同士の連携」と「出会いの場」の創設であったのではないかと考えられる。[小玉]

### 【指定討論】

#### 1. 幼稚園と小学校の連携・接続をめぐる歴史的考察：

### 湯川嘉津美（上智大学）

浅井報告と太田報告をもとに、幼小連携・接続をめぐる歴史的考察を行った。幼稚園と小学校との連携・接続は、フレーベルによる幼稚園の創設時から考えられていた問題であり、日本における幼稚園の導入時には、小学校への円滑な移行を図るために、幼稚園の最上級に「接続級(connecting class)」が設置されたこともあった。

幼小の連携・接続について、歴史を振り返れば、①「接続級」を設置して、接続期のカリキュラムを作成する、②子どもの発達の連続性を視野に入れて幼小連携カリキュラムを作成し、幼稚園と小学校の双方で適切な教育を行う、の二つの方法がとられてきたことがわかる。ただし①は制度改革を伴い、②は幼稚園と小学校双方で指導理念の共有化を図り、併せて小学校低学年教育改革を行う必要がある。さらに、それを実行するには、幼稚園と小学校の教員養成のあり方を見直し、幼年教育教員の養成を図る

必要があることを示した。〔湯川〕

## 2. 1980年代以降の幼児教育改革と幼稚園・小学校接続期についての考察:

高田文子 (白梅学園大学)

小玉報告をもとに、1989年ナショナル・カリキュラムの影響とそれ以降の状況についてコメントした。1989年の改革は、大多数の幼稚園にとっては、保育観、保育者像、指導方法など根底からの変革を求めるものであった。しかし、改革までの25年間のブランクは、各園の考え方を園文化として定着させ、学校的幼稚園を貫いてきた多くの園においては、そ

の体質から脱却できずに、幼小接続期においてもある意味スムーズに学校化に巻き込まれていく土壌を固めた。また、保育の質や専門性の議論が深まっていった90年代以降、その理念と実態は乖離し、小学校側からの幼児教育理解をも遠ざけた。一方、お茶大附幼は、歴史的にも創設時から全国の幼稚園の模範という特別な存在であり、国の幼児教育改革を先行してきたともいえる。このようなごく限られた園においては、幼小連携においても多くの変革を強いる必要はなく、自園の保育の質にゆるぎないものを持っているがゆえに、小学校側のスタンスに巻き込まれることはないであろう。〔高田〕



## 新入会員・会員異動 (2019.6~2020.1.31) 省略

## 寄贈図書 (2019.6~2020.2)

- ・比較家族史学会監修, 小島 宏・廣嶋清志編, 2019, 『家族研究の最前線④人口政策の比較史:せめぎあう家族と行政』日本経済評論社
- ・国立教育政策研究所編, 2020, 『幼児教育・保育の国際比較:OECD 国際保育/幼児教育従事者調査 2018 報告書:質の高い幼児教育・保育に向けて』明石書店
- ・アンドレアス・シュライヒャー著, 経済協力開発機構(OECD)編, 一見真理子・星三和子訳, 2020, 『デジタル時代に向けた幼児教育・保育:人生初期の学びと育ちを支援する』明石書店

## 機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第15号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2020年5月1日から5月31日までに事務局にお送りください(郵便は当日消印有効、宅配便などは必着)。詳細については[学会ホームページ掲載の投稿要領](#)をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

## 事務局からのお知らせ

### 1) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、会費納入状況を確認のうへで(2020年2月時点)、第15回大会年度(2019年10月1日~2020年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうへご納入ください。(振り込み用紙が入っていない

会員は完納状態にあります。) なお、本状と行き違いでご納入いただいております場合は、何卒ご容赦ください。

年会費： 一般会員 7,000 円      特例会員(学生・退職者等) 4,000 円

送金先： 郵便振替 00190-9-73668      加入者名： 幼児教育史学会

## 2) 「会報」への原稿募集

会報を通じた情報提供と交流をはかっています。会員からの研究情報、自己紹介文、また、幼児教育史研究への提言、関連エッセイなどを事務局までぜひお寄せください。年2回の会報発行時までには届いた分を調整の上、随時掲載いたします。次回会報は2020年6月頃を予定しています。

## 3) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて学会事務局までお知らせください。年度切り替わり時につき、特によろしくお願ひ申し上げます。

幼児教育史学会会報 第29号 2020年2月20日

発行者 幼児教育史学会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1  
東京学芸大学 総合教育学系 福元真由美研究室気付  
幼児教育史学会事務局

E-mail: [admin@youjikyokushi.org](mailto:admin@youjikyokushi.org)

郵便振替 00190-9-73668

編集 一見真理子      印刷 木元省美堂